

目次：

時間学アフタヌーンセミナーin 福岡 「心は過去で出来ている」を開催	1
時間学国際セミナーを開催	2
明治大学先端数理科学インスティテュートと研究協定締結	2
時間学特別セミナー「複雑科学と時間学：その交流と発展」を開催	2
10月着任教員紹介	3
モスクワ工科大学長招へい	3
サロン所長室「能と時間学」前編	4



時間学アフタヌーンセミナーin 福岡

『ここは過去で出来ている』を開催

平成27年10月2日(金)、アクロス福岡・円形ホールにて、時間学アフタヌーンセミナーin 福岡が開催されました。甲斐昌一所長(時間学研究所)の開会挨拶に続き、福岡大学人文学部・教授 平井靖史先生が登壇され、「ここは過去で出来ている——現代時間論から見る心の哲学」との演題にて講演されました。本セミナーは市民一般を対象として企画されたものでしたが、当日は150名を超える方々が聴講され、当初準備した客席が足りないほどのたいへんな盛況となりました。

平井先生は近現代フランス哲学を専門とされており、アンリ・ベルクソンやゴットフリート・ライプニッツといった哲学者の議論に関して多くの論稿を発表されていますが、本セミナーでもベルクソンの議論を手掛かりに、「時間の哲学」と「心の哲学」との結びつきについてお話しされました。そのお話しの中核には、ベルクソンならではの「記憶」についてのユニークな考え方があり、「ここは過去で出来ている」との演題も、その発想から来ています。さらに講演では、フランス哲学の枠を超えて、現代時間論の中心にあるJ・M・E・マクタガートの議論も取り上げられましたが、その解説には平井先生独自のアイデアが組み込まれており、明快かつ啓発的なものでした。平井先生の講演ののちには、本セミナーのコーディネーターを務めた青山拓央准教授(時間学研究所)の司会のもと、聴衆と平井先生とのあいだで活発な質疑応答がなされ、講演内容についての理解をより深めることができました。

時間学研究所ニュースレター
2015年度第2号をお届け
します。

《時間学研究所》
〒753-8511
山口市吉田 1677-1
TEL/FAX : 083-933-5848
jikann@yamaguchi-u.ac.jp
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp



平井靖史先生



会場の様子

時間学国際セミナーを開催

平成27年8月10日（月）に国際時間学会（I S S T）会長のシュタイネック・ラジ先生（チューリッヒ大学文学部日本学・教授）をお迎えし時間学国際セミナー「時間学の学際的研究課題ー海外における時間研究の現在」をテーマにセミナーを開催しました。学内の時間学研究関係者をはじめ日本時間学会の会員らも各地から参加しました。



シュタイネック・ラジ先生

まず、ご自身の研究分野である日本思想史から見た時間の理論のあり方についてご講演いただきました。その後、海外においても領野横断的な時間研究を目指す動きが活発化していること、しかしながら現状では個別研究の林立にとどまり、学際的アプローチが十全に達成されているとはいいがたいこと、また、事態をブレイクスルーするためには、時間概念の洗練化が必須であること、の3点を指摘されつつ、主観的・社会的な時間と客観的・物理的な時間、名目論的な時間概念と実在論的な時間概念という二項対立を揚棄し学際的研究に向けた新しい時間コンセプトを構築するための^{しげきてき}刺戟的なアイデアをご提示されました。

また、国際時間学会の活動について出席者から質問を受けると、現状と展望を踏まえて答えられました。同じ問題意識を共有する参加者が多かったこともあり、質疑応答では、理系・文系の枠組みを超えた時間研究の進め方を中心に活発な議論が行われました。甲斐昌一所長（時間学研究所）や辻正二会長（日本時間学会）とも、今後の研究連携について積極的な意見を交わされ、「時間学研究」の国際的拠点化に向けたさらなる研究活動へ発展する大変意義のあるセミナーとなりました。



参加者との記念撮影

明治大学先端数理化学インスティテュートと研究協定締結

平成27年10月15日、時間学研究所と明治大学先端数理化学インスティテュートは両機関の研究活動の推進等を目的として、研究協力に関する協定を締結しました。

- ・共同研究の企画・実施
- ・研究者の交流

協定の有効期限は、平成28年3月31日。特に両機関から申し入れがない限り継続。

時間学特別セミナー開催

平成27年11月24日（火）山口大学吉田キャンパス総合研究棟フォーラムスペースにおいて、時間学特別セミナー「時間学と複雑科学：その交流と発展」を開催しました。

まず、蔵本由紀先生（京都大学・名誉教授／時間学研究所・客員教授）より、【科学における「つながり」と「切断」】の



蔵本由紀先生

テーマでご講演いただきました。続いて、金子邦彦先生（東京大学総合文化研究科・教授／東京大学複雑系



金子邦彦先生

生命システム研究センター長／時間学研究所・客員教授）には【普遍性生物学と時間的階層】について、三村昌泰先生（明治大学先端数理科学インス

ティテュート・副所長／明治大学・教授）には【閉鎖系と開放系の狭間に現れる自己組織化現象】についてご講演いただきました。また、三村先生は本研究所と10月に締結した研究協定（上記事参照）についても触れられ、大変充実したセミナーとなりました。



三村昌泰先生



Tishchenko Serge 先生

Profile

2009 PhD Degree in Applied Mathematics, with honors, University Pierre et Marie Curie, Paris (France).
2012. Associate Professor, Economics Department, Moscow State University, Moscow (Russia).

Research

私の研究分野は、数学、経済学、社会学とコンピューターサイエンスの中間にあります。所定の問題ごとに、時間に関して効率的なアルゴリズムを構築し問題を解決することに興味を持っています。



寺尾 将彦 先生

Profile

1981 年生まれ(兵庫県出身)。関西学院大学大学院文学研究科総合心理科学専攻博士課程後期課程単位取得退学。博士(心理学)。日本学術振興会特別研究員、東京大学特任研究員などを経て2015年10月に本研究所に着任。

Research

私たちが普段感じる事ができる時間は脳の情報処理の産物であり、物理的な時間とは異なるものです。このころの時間の背景にどのような情報処理原理が働いているのかを主に心理物理学的手法と眼球運動測定を用いて調べ、このころの時間の実体を理解する事を目指しています。



モスクワ工科大学のシゴフ先生を招へいしました。

平成27年11月6日～26日の日程で、モスクワ工科大学・学長のアレキサンダー・シゴフ先生（モスクワ大学・副学長兼務）が時間学研究所へ来所、滞在されました。

滞在中は、【時間学特別セミナー「Introduction of Russian Research State and Policy」「Thin Film Ferroelectric Materials」】と題しロシアの科学技術政策の現状やご自身の研究について講演するなど、セミナー等を通じて研究所内外の研究者と積極的に交流を行いました。また、三池秀敏副学長（学術研究担当）の案内で、吉田キャンパス総合図書館で開催中の『山口県大学 ML（ミュージアムライブラリー）連携特別展 in 山口大学』を訪れ、時間学研究所関連の展示を見学し多岐に渡る研究分野に興味を示しました。

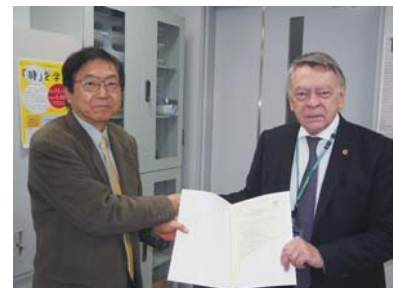
その他、三浦房紀副学長（国際・地域連携担当）から山口大学の概要および学術交流協定について説明を受け、将来の共同研究に強い意欲を示しました。さらに岡正朗学長とも面談を行い、モスクワ工科大学の組織や研究体制の紹介の後、両校の研究連携等について活発な意見交換を行い、11月26日、山口大学とモスクワ工科大学の大学間学術協定が正式に締結されました。



歓迎会の様子



アレキサンダー・シゴフ先生



甲斐所長（左）シゴフ先生（右）



所長室で毎月1回「サロン時間学」の会合があります。先日、その場で世阿弥の「風姿花伝」を話題にしました。ここではその話の続きをしましょう。但し、原文訳も含め自己流でかつ個人的な類推も含むので、あくまで私見です。

能といえば、すぐに観阿弥(楠木正成の甥)と世阿弥の名前が浮かぶ。世阿弥は数多くの作品や文書・著書を残しているが、父親の観阿弥には著書・逸文が1つもないので、彼は文盲だったのかもしれない(というのは当時の能楽師は「河原乞食」と呼ばれ身分も低く教養もなかったようである)。しかし息子(世阿弥)の教育には熱心だったようで、天才肌の世阿弥をパトロンであった足利義満をはじめ武家や公家と深く交際させることで教養豊かに育てたようである。その成果として、観阿弥作と伝わる能は数作品と少ないにもかかわらず、世阿弥作の能は非常に多く100作品ほどある(注:正確に数えたことはない)。世阿弥の能に関する代表的な著作(理論書)、三花伝書「風姿花伝」、「花鏡」、「却来花」はそれぞれ40才代、60才代、70才代に書かれた。いずれも世阿弥の人生の転換期に書かれ、その時代の世阿弥の能に対する考え方を記したものとなっている。なかでも最盛期に書かれた「風姿花伝」は、能の奥義をたった一言で述べ「風の姿で美を伝える」(私の勝手な解釈。”幽玄”に繋がる言葉)を意味しており、世阿弥を代表する芸術論書として戦前の上流階級では必読書だったようである(但し、この書は今風に言えば「能」のマニュアル書である)。

「風姿花伝」の前書きには、「それ申樂の源を尋ぬるに、あるいは佛在所よりおこり、あるいは神代より伝わるといへども、---、推古天皇の御世に秦河勝(はたのかわかつ)に仰せつかって天下太平のため、また諸人快樂のため66番の遊宴をなして申樂と号せし。一略一」と書かれている。つまり世阿弥(本名は秦野三郎元清)によると、聖徳太子が国家の太平や諸氏の楽しみのために66番の演舞を秦河勝に命じ、それを申樂と呼んで面を作って授けたそうである¹⁾。この花伝書には物真似のポイントや重要性、各年齢での能の学び方、教授の仕方が書かれているが、その教育論はまさしく現代の研究者教育に通じるものがある。例えば、若いころにいくら周囲からもてはやされても、多くはその実力ではなく若さでもてはやしているものでありそれを間違えるな、35歳までには本当の能を極め実力をつけないと40歳以降は能の技量は下降し大成しない、見かけだけで極めたと振舞うな、自分の実力以上に自分を評価することなく常に精進し学び工夫せよ、45歳以降は若手の役者を育成することに努めよ、年齢ごとにその果たす役割や学ぶべきことは違う---などが書かれている。

ところで「風姿花伝」の能のカテゴリー分類「神、男、女、狂、鬼」を、江戸時代にはそれぞれ初番目物から五番目物(脇能、修羅能、鬘能、雑能、切能)とし、それを組み合わせて1日に5番立て(あるいは「翁」(特別番)を入れて6作品)で演じることが慣習となった(それぞれの間に休憩がわりに狂言が演じられた。つまり一日に11作品となり1回の公演が計十数時間に及ぶ)。1番から5番に属する能がそれぞれ30から50作品程度あるため、それぞれのカテゴリーから何を選ぶかを決め、その組み合わせを「番組」と呼ぶ(能から派生したこの用語が現在プログラムを意味する日本語として使用されている)。

世阿弥の晩年は、跡継ぎ十郎元雅²⁾を失い、さらに室町幕府から佐渡への流罪を受け、苦痛に満ちた生涯であった。ちなみに現在の観世家は世阿弥の直系ではなく、甥の音阿弥(元雅のライバル)からつながる家系である³⁾。世阿弥は優秀だった元雅に奥義を授け、その死後、義理の息子、金春禅竹に奥義を授けた(娘婿、金春流の大夫。禅竹も優秀な能楽師・理論家で禅竹作の能も多い)。

能は、原則、大道具や小道具を使わず、足さばき、扇の持ち方や手の所作で微妙な感情や心の移り変わり、背景、場面、進行など全てを表すので、鑑賞には豊かな想像力と感性が必要な芸能である(この「芸能」という言葉は世阿弥が能の技術・技量の意で使用した。) ⁴⁾。能を実際に鑑賞すると時間学との関連性を彷彿とさせる。三島由紀夫の「近代能楽集」にも「能楽の自由な空間と時間の処理や、露わな形而上学的主題などをそのまま現代に生かすために---」と書いているように、能では時間と空間を自由に彷徨う、いわゆるタイムマシンが出てくる。例えば、修羅能の「田村」は室町時代(能では現代)と平安時代(過去)を登場人物や場面が行き来する。修羅に限らず初番から5番までのほとんどの能に現在と過去がさまざまに入り込み、時間が主軸の芸術作品となっている(ただ当時は未来を想像できなかったのか能には未来は出てこない)。加えて能は人間の深層心理を巧みに描写する芸術で、多くはその深層心理を夢の形で描く。これは時間心理学と言える。

(前編を終わります。注釈番号1~4の説明は後編の後に記載しますので、前・後編を通して読んだ後に注釈をどうぞ。)